HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リーランド招聘に関する経緯 ： アマースト大学所蔵文書の分析を中心として
Author(s)	大櫃, 敬史
Citation	北海道大學教育學部紀要, 73, 1-34
Issue Date	1997-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29528
Type	departmental bulletin paper
File Information	73_P1-34.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

リーランド招聘に関する経緯

――アマースト大学所蔵文書の分析を中心として

大　櫃　敬　史

The Invitation of Dr. Leland as the Gymnastic Instructor in Japan, and its Background.

Takashi OBITSU

はじめに …… 1
Ⅰ．アマースト大学所蔵――シーリー文書について …… 3
～田中不二麿よりシーリー教授宛て書簡
Ⅱ．日本側教育関係者（田中不二麿・目賀田種太郎）のアメリカでの活動 …… 6
1．田中不二麿のリーランド招聘を巡る動き …… 6
2．留学生監督目賀田種太郎のアメリカにおける活動 …… 8
Ⅲ．アマースト大学体育学科の成立（1860～80年） …… 10
1．「Amherst Plan」の特質 …… 10
2．「Amherst Plan」の担い手たち …… 16
a．体育学科創設とヒッチコック・エドワード …… 16
b．三人の後継者 …… 20
1）ネーザン・アレン（Nathan Allen） …… 20
2）エリシャ・ハバード・バーロウ（Elisha Hubbard. Barlow） …… 24
3）ジョージ・アダムス・リーランド（George Adams. Leland） …… 25
Ⅳ．リーランド招聘に至る経緯 …… 27
1．1877年2月9日付書簡 …… 27
2．1878年3月6日付書簡 …… 28
3．1878年8月15日付書簡 …… 28
おわりに …… 29

はじめに

わが国の近代体育が，アメリカから招いたジョージ・アダムス・リーランド博士（Dr. George Adames. Leland）によって直接指導を受け，以後飛躍的に普及・発展していったことは周知の事実である。リーランドについては，体操伝習所の設立と彼の招聘を巡る田中不二麿や伊沢修二等の果たした役割を主として日本側の史料から考察したもの，彼の生涯を概観しつつ体操教師として日本へ赴任することになった経緯と彼の人物像を検証したもの，更には彼の教育観乃至体育観並びに世界観や心身観に触れ，彼の体操系譜について考察を行ったもの等様々な角度からの研究[1]がなされている。これらは，わが国に所蔵されているリーランド関係史料及び米国所蔵の史料を駆使しながら，かなり詳細な研究がみられるものの，これまでリーランド招聘の経緯に関わる

問題は，原史料が不明であったため，未解決のまま残ったのである。このテーマに関する先行研究を整理すると，およそ次の様である。

真行寺朗生は，『近代日本体育史』の中で，田中文部大輔が，米国に外遊して，アマスト(ママ)大学を視察した時日と，いよいよリーランドを招聘するに至った手続きに関しては，種々なる異説があるとした。第一の時日に就いては，(1)初年説と，(2)十年説と，外に，(3)十一年説を唱えているものもある。第二の手続きに関しては，(4)帰朝草々極力主張した結果招聘するに至ったという説と，(5)ヒッチコックと相談して招聘のことを約束して来たという説の二つに分かれている。その中で，(1)と(4)とを結び付けた説は，日本体育会編纂『日本之体育』によったもので，(2)と(5)とを結び付けた説は，坪井玄道の説くところである。(3)については，全く否定しながら先の二つを検討して，第一回目の外遊の際には，『理事功程』及び『欧米教育視察記』（田中不二麿著）のいずれをみてもアマスト大学に関する記述は一切みられない。そこで，明治初年の外遊とアマスト大学視察とを結び付けることは，甚だ困難であると結論づけた。坪井の十年説については，彼が漠然とした古い記憶を辿って書いたための誤謬だと見て差支ないとしながら，以下にその証拠を挙げている。一つは，ヒッチコックに託してリーランドを招聘することにしたという説と，他の一つは，体操伝習所の修業年限が三カ年であったという説である。勿論，ヒッチコックと内約定位はしたかもしれない。けれども正式に招聘の手続きを取ったのは，リーランドが伊沢修二に呈した意見書によれば，書をエッチ・シーレー(ママ)に送ったことに始まったものと見なければならない。尚帰朝後極力主張したという説も，当時の新聞にもなければ，文部省発行の『教育雑誌』等にも一切見られないところから判断すれば，太政官へ意見書なり伺書を提出した可能性もあることを示唆している。

今村嘉雄は，『十九世紀に於ける日本体育の研究』の中で，田中が二回目の渡米に際し，アマースト大学を訪問した可能性について，同大学の卒業生フィリップの稿[2]を引用しながら，前述の真行寺説に修正を加えた。「上略，文部次官の田中不二麿が，1876年から1877年にかけて，身体鍛錬（注体育）を含む教育制度の研究視察のため，政府から世界諸国に派遣された。ボストン・ポスト紙の報道を引用するならば，『長い時間に亘って種々調査し且研究した制度のうち不思議ではあろうが，この飾り気のない，ささやかなアマースト大学の制度を，最も優秀であるとする』と報告した。」尚フィリップは，田中のアマースト視察に，W.S. クラーク（札幌農学校教頭）が関与した点も合わせて指摘した。以下これらの点に関して，今村の説は，次の様に要約される。田中のアマースト訪問は，少なくとも前後2回に亘っている。第一回は，明治5年4月新島襄と共に，シーリー学長を訪れている。第二回は，「明治9年渡米の際，アマースト大学付属体操学校の整備せるを目撃し，幸に大学長は会識の人なれば，是と商識する所あり，竟に該校出身のドクトル・リーランド氏を聘することとなれり」と述べている通りである。リーランドが候補として話題に上がったとすれば，9年の時点であったと考えてよい。しかも田中は，第一回の訪問の際には，アマーストの体育施設，実施概況についての視察は果たさず，9年の訪問の時初めて果たしているように考えられる。田中がアマースト訪問以前にクラークに逢ったとすれば，恐らく明治5年のアマースト訪問前後であったと考えるべきであろう。

以上ここでみる限りにおいて，いずれの説も推測の域を脱していないことがわかる。

筆者は，1995年9月の渡米の際に，マサチューセッツ州アマースト大学図書館において，幸いにして原史料を発見することが出来た。本稿は，この原史料及び関係史料を手がかりに，以下の3点にわたって問題点を実証的に解明しようとするものである。①アマースト大学学長シーリー

(出会った当初は教授の職にあった。) と当時の文部大輔であった田中不二麿との間に交わされた10通全ての書簡を分析の対象とする。この時期の二人の交流全体を概観しながら，これまで先行研究の中では，不明確であった，時日，どの様な具体的手続きが行われたのかを，これらの書簡に基づいて一挙に明らかにしていく。②リーランド招聘に深く関わった日本側の人物—田中不二麿，目賀田種太郎等—のアメリカでの足跡を辿りながら，彼等の果たした役割にについて検証する。③アマースト大学体育学科（学科創設からリーランド来日当時まで）の創設と活動を跡づけながら，Amherst Plan の特質，その担い手たちを明らかにしていく。その成果として当時のアマースト方式 (Amherst Plan) の事実上の継承者としてわが国の体育指導を担うに相応しい力量のあった複数の人物ネーザン・アレン (Nathan Allen)，エリシャ・ハバード・バーロウ (Elisha Hubbard. Barlow)，ジョージ・アダムス・リーランド (George Adams. Leland) に注目し，彼等の経歴，教育・研究及び著作活動に立ち入って検討する。そして様々な条件を考慮した結果，最適任者としてリーランドが選任され日本に赴任することになった経緯についても，可能な限り解明していく。

Ⅰ．アマースト大学所蔵シーリー文書について ～田中不二麿よりシーリー教授宛て書簡

史料1にみられるように，田中とシーリーの交流を示す史料は，全体で10通の書簡が所蔵されている。これまでの先行研究では，こうした書簡の全体を取り上げて二人の親交の中味に触れた検討はなされなかった。

①当時文部大輔の職にあった田中不二麿とアマースト大学教授シーリー[3] との交流は旧く明治6 (1873) 年まで遡る。この時は，特命全権大使岩倉具視一行に伴い欧米視察を行いその中途，アマーストを訪れた際のものである。ここでみる限りにおいては，アマースト大学で実際に行われていた体育実践の視察は行った形跡はみられなかった。公式的な表敬訪問であったと推察される。

②その後同年秋11月には，わが国高等教育機関を代表する開成学校並びに東京帝国大学の新校舎落成を記念して撮影された明治天皇臨席の写真を送付している。

③またこの時期，日米両国の間で種々論議されていた「下関賠償金問題」[4] に関しても深い関心を示していることが窺える。彼は手紙の中でこの問題に関しての私見を述べ，アメリカ国内で起こっている議論を踏まえてそれに対する注釈を加えている。合わせて「日本の賠償金」に関する当時の新聞記事を送り，国内での反応を知らせる努力も行っていた。文面から推察すれば，博士はわが国の立場に立った極めて好意的な意見を持っていたものと考えられる。

④1875年次第に発展をみせるわが国の教育を報じ，特にアメリカを模範とする師範学校制度の充実ぶりに改めて感謝の意を表している。そして今回新たに決定した3名と既に科学分野で留学が決まっている合計12名が博士のお世話を頂くことが予想されるので，ご配慮願いたい旨を申し述べている。

⑤，⑥，⑦の史料に関しては，Ⅳの箇所で詳しく述べるのでごく簡単に取り上げることにする。⑤田中不二麿がフィラデルフィア博覧会に出席しその帰途，教育制度調査の為ニューイングランド及び南方諸州を視察した際，二度目にアマースト大学に立ち寄った際のことである。一行はこの滞在期間中，大変有意義な時を過ごした事実を伝えている。この時の手紙では「貴大学を見学させて頂き，誠に興味深いものがございました。」としか伝えていないが，その後の手紙によれば，

ここで初めてアマースト大学で実施されていた体育に直に触れる機会を持ったことになる。

ついで，⑥においてその時の詳しい状況を伝えている。「貴大学で見学した体育訓練」が大変新鮮でかつ興味深いものに感じられたこと。帰国後わが国の体育実施の実情をみるにつけ，大変な隔たりが感じられた。この機会に是非ともアメリカの特に貴大学に範を採り体育教育の充実を計っていきたい。ついては，博士にお願いして有能かつ適格な指導者を差し向けて頂きたい旨の要請を行っていたことがわかる。

⑦1878年3月6日付の親書によって体育教師の要請を正式に行い，シーリー学長からは同年6月3日付の書簡にてその返事を受け取っている。アマースト大学の卒業生でかつ医師であるジョージA.リーランド氏の推挙を受けたことを報告している。博士のご尽力のお陰で大変有能でかつ才長けた人物を得ることができた喜びを率直に伝えている。リーランドに大きな期待を寄せ，その結果としてわが国の体育が著しく進歩改善することを大いに嘱望していたことが窺える。

⑧リーランドが来日をして以来，約8カ月経過した現在これまでの彼の仕事振りを紹介し極めて着実な成果が上がっていることを述べている。そして念願であった体操伝習所も完成しようやく体育振興の緒に着けた喜びを表している。(今村『学校体育の父　リーランド博士』資料12　田中不二麿書状—シーリー宛　同書では，1879年4月10日付書簡のみが取り上げられている。)

⑨アマースト大学留学を終えて帰国した神田乃武からシーリー博士の近況報告を聞き，感慨深い思いで受け止めたこと。先頃教育法制度改革案を建議，公布に至ったこと。まもなく文部省刊行英訳版新教育法（明治12年学制を廃止し，公布された教育令をさす。）一部を，博士へ献上することを約束している。

⑩文部省の職務離任挨拶と在任中の御礼を述べる一方，今度新たに決定した法務大臣任官の報告を行っている。最後に新文部大臣として任官された河野敏鎌を紹介し，これまでと相も変わらない親交が継続することを切望して手紙を締め括っている。

史料1　シーリー関係文書（アマースト大学所蔵）

田中不二麿よりシーリー教授宛て書簡

①2533年（1873）9月8日　　＊ここのみ皇紀年号が使用されている。

米国訪問，帰朝報告・御礼

文部省文部大臣代理公使　　アメリカ合衆国マサチューセッツ州

田中不二麿　　アマースト大学　シーリー博士

②1873年11月7日

開成学校及び東京帝国大学新校舎落成記念写真（天皇陛下臨席）の送付

文部大輔　　アメリカ合衆国マサチューセッツ

田中不二麿　　アマースト　シーリー博士

③1874年5月7日

シーリー博士よりの書簡及び「日本の賠償金」に関する新聞記事

文部大輔

田中不二麿　　シーリー博士

④1875年8月10日
親書受信についての御礼，留学生受入れ依頼
田中不二麿　　シーリー博士

⑤1877年2月9日
米国訪問御礼（1876年秋11月上旬　アマースト大学訪問）
田中不二麿　　シーリー博士

⑥1878年3月6日
体育教師の招聘(体育教師選任依頼方…交渉役：目賀田種太郎〈在ボストン文部省出仕〉)
文部大輔　　アマースト大学学長
田中不二麿　　シーリー

⑦1878年8月15日
1878年6月3日付　体育教師選任に関する書簡（G.A.リーランド博士推薦について），体育教師選任に関する御礼，リーランド博士に寄せる期待，契約に関する進捗状況
文部大輔　　アマースト大学学長
田中不二麿　　シーリー

⑧1879年4月10日
リーランド博士赴任後の活動報告，わが国体育教育の実情報告，リーランド博士選任に関する御礼…贈答品（古漆器）送付
文部大輔　　アマースト大学学長
田中不二麿　　シーリー

⑨1880年1月10日
1879年9月11日付　書簡拝受，アマースト大学留学の神田乃武帰国（博士の近況報告，新型万年筆の拝授，御礼）
教育法制度の建議・公布，英訳版新教育法の贈呈（一部）について
文部大輔　　アメリカ合衆国マサチューセッツ州
田中不二麿　　アマースト
シーリー学長

⑩1880年12月12日
法務大臣任官（文部省の職務離任挨拶，在任中の御礼）
新文部大臣紹介…河野敏鎌任官，親交を依頼
法務大臣　　アメリカ合衆国マサチューセッツ州
田中不二麿　　アマースト
アマースト大学学長
シーリー学長

II．日本側教育関係者（田中不二麿・目賀田種太郎）のアメリカでの活動

1．田中不二麿のリーランド招聘を巡る動き

これまで田中不二麿が米国を訪れ，リーランド招聘に関する交渉を行った経緯を巡り，諸説が述べられている。その主なものを取り挙げると以下の様である。

第一に時日については，田中の最初の外遊は，明治4年（1871）11月で，理事官として欧米各国の教育事情を調査し，明治6年3月帰朝した。その結果は文部省編「理事功程」に詳述されているが，その中にはアマースト訪問を示す記述はみられない。しかし新島襄によると，明治5年田中は岩倉大使一行に加わって渡米したが，この時アマースト大学を訪ねシーリー教授他同校関係者に面会したことを明らかにしている。

明治5年4月23日　田中理事官と共にボストンを去ってアマースト大学に到り，シーリー博士を訪問
24日　シーリー博士及びクラーク学長の案内で神学校，農学校を参観
25日　アマースト大学を参観
26日　アマースト大学理学部実験を参観後，シーリー，ヒッチコックの案内でノーザンプトン研究所の聾唖教育を見学
27日　アマーストを去る

とあって，田中は，シーリー教授やヒッチコック教授と直接交遊している。
（同志社校友会「新島先生書簡集」より引用）

また伊沢修二によると，「田中文部大輔が岩倉大使に随行して欧米の諸州を回覧した当時，米国マサチュセッツ州のアマスト（ママ）コレージに行って見た。所が其学校に体操が非常に良く行われておった。……田中大輔はそれを見て深く感心し，是非共我国の学校でも彼式の体操を課したいと思われた。」としている。土屋忠男は，『明治前期教育政策史の研究』の中で「田中が明治5年4月，新島を伴って……アマスト大学得意の整容体操 Calisthenic exercises をこの時見なかったはずがない。この時の印象で帰国後体育の創始について考慮した際にアマスト大学からの教員招聘を思い，第二回渡米の際その交渉をもったであろう。」と指摘している。

能勢修一は，『明治期学校体育の研究』の中で，「いずれも田中は，第一回の渡米の際アマースト大学の体育を見学したとしているのである。これから田中は，再渡米以前に体操教師を招聘する方針を持っていたといえる。」と結論づけている。

しかしここで取り挙げられた指摘は，いずれも田中が第一回の渡米の際アマースト大学を訪れ体育に触れたとする傍証としては不十分である。何故ならばそれを実証する確かな史料を欠いているためである。

第二の手続きに関しては，田中の二回目の外遊は明治9年4月アメリカ開国百年記念フィラデルフィア博覧会の教務事務取調のため渡米し，翌年1月に帰国した。第二回について，今村嘉雄は，『十九世紀に於ける日本体育の研究』，p 909～910. の中で，

田中不二麿「教育瑣談」（大隈重信撰『開国五十年史』，上巻収録）に『九年余の渡米の際，アームスト（ママ）大学付属体操学校の整備せるを目撃し，幸に大学長は会識の人なれば，是と商識する所あり，竟に該校出身のドクトル・リーランド氏を聘することとなれり』と述べている通りである。一回目の会談でリーランド招聘の話が交わされたかどうかは不明であるが，当時リーランドはアマースト大学の2年（Sophomore year）に在籍中であったから，体育教師招聘の話

はあったかもしれないが，リーランドは恐らく候補としては挙げられていなかったであろう。従ってリーランドが候補として話題に上ったとすれば，九年のアマースト訪問の時であったと考えてよい。しかも田中は，第一回の訪問の際には，アマーストの体育施設，実施概況についての視察は果たさず，九年の訪問の時初めて果たしているように考えられる。

と述べている。

また先に取り挙げた能勢はこの点にも言及して，文部省「学第2016号」（外国人体育教師を招聘して各学校生徒に授業を行うことを明らかにした。）に対する大坂英語学校の回答文書は，明治10年12月26日付であり，これからみると，文部省がアマースト大学長に対し，体育教師招聘の公式手続きをとったのは，11年1月以降であると結論づけている。また倉沢剛は，『小学校の歴史Ⅰ』の中で，リーランドの契約については，「11年3月以前に米国に頼んでおき，あちらで条約を取り決めた。」としている。

ここで述べられている見解は，依然として不確かな推論を多く含んだ範囲に止まっているといえよう。

Ⅰ．田中不二麿よりシーリー教授宛て書簡においてすでに指摘したように，田中の二回目のアマースト訪問は，1876年秋（11月上旬）に行われ，ここでの実際の見聞が直接的契機となって，帰国後の1878年3月に体育教師選任の依頼が親書に込められることになる。これを受けたアマースト大学側では，実際に候補者を選ぶ段階において，当時体育学科の責任者としての立場にあったヒッチコックに相談が持ちかけられたことは必定であり，日本の要請に応え得る有能かつ適任者としてリーランドを推薦したのである。

こうした事実は1881年に刊行された『アマースト大学体育学科二十年の歩み』[5]によっても確認することが可能である。「1876年秋，文部大輔田中不二麿氏がアマースト大学を訪れ，体育授業の一つを見学した。その際彼は大きな関心を示すと共に翌年シーリー学長宛て日本の官立の学校にアマースト方式の体育を指導できる人物を招聘したい意向を伝えた。ジョージA.リーランド博士（1874年クラスキャプテン）が3ヶ年の契約で選出されることとなった。」と述べている。

以上のことからシーリー博士と当時におけるわが国文教行政の第一人者としての田中不二麿の交遊は，明治5年（1872）に始まり以降，書簡や直接の訪問等を通してお互いの親交を深める中で，当時米国で実施されていた体育の導入が画策される結果となった。本格的な直接交渉が始められたのは，1878年3月であった。

田中不二麿事跡

明治2年（1869年）10月　大学校御用掛拝命
4年（1871年）10月　文部大丞拝命
11月10日　特命全権大使岩倉具視一行に伴い，欧米視察の為，横浜を出発
12月6日　米国到着（約6ヶ月間，米国の学事を視察）
5年（1872年）4月23日＊新島襄を伴って，アマースト大学シーリー教授を訪問
24日＊シーリー，クラークの案内で神学校，農学校を参観
25日＊アマースト大学を参観
26日＊アマースト大学理学部実験を参観後，シーリー，ヒッチコックの案内でノーザンプトン研究所の聾唖教育を見学

	27日	＊アマーストを去る
	5月11日	米国出発
	20日	英国到着
6年（1873年）	3月	帰国，直ちに文部省三等出仕
	9月	「理事功程」を上奏
	11月2日	文部少輔拝命
7年（1874年）	9月27日	文部大輔拝命
9年（1876年）	4月25日	フィラデルフィア万国博覧会教育取調べの為渡米
10年（1877年）	1月	帰国，「米国百年期博覧会教育報告」（全4巻）文部省から刊行
11年（1878年）	10月	「米国学校法」（上，下2巻）文部省から刊行
13年（1880年）	3月13日	司法卿拝命

＊同志社校友会刊「新島先生書簡集」引用

2．留学生監督目賀田種太郎[6]のアメリカにおける活動

明治4年10月欧米特派全権大使岩倉具視一行が大命を奉じて，東京を出発し同年12月米国ボストンに到着した。当時彼は，アレン学校（ハーバード大学入学のための準備教育を受ける目的のため）在学中であったが，時の米国公使森有礼の推輓によって大使一行の歓待とその他の用務に付いて，米国商務局長の下で活動する機会を与えられ，ベルハウスに於ける大晩餐会にも，当年19歳であった目賀田が列席することを許されたのである。この時，森公使の斡旋で行われた事業としてのボストン公立図書館における日本歴史及び文学関係の書籍の蒐集を，彼は米国政府の依嘱を受けてこの事業に専心した。米国において目賀田がこうした仕事に関わることになった最初のきっかけであった。

次にアメリカとの深い繋がりを持つことになった出来事は，太政官正院より米国留学生監督として命を受け，その傍ら自己の勉学にも当たるよう指示を受けた時にあった。実際に彼の監督に属する9名は，コロンビア大学（4名），ハーバード大学（1名），ボストン大学（2名），レンセレール工大（2名）への入学を予定していた。

彼が留学生監督として取り組んだ課題に，以下のものがあった。

Ⅰ）留学生学資金問題　とりわけ当時日本金貨の下落が生じ日本人の為には相当不利益が生じていた。そこで初年度のみに於いては貸与規則に基づいて，一人一年壹千圓に過不足が生じた場合，書籍または器械の費用は定額以外に貸し付けることとした。

II）留学生貸費規則改正意見　現今の規則（貸費は卒業後三年を経て二十ヶ年賦返納の規定）を論議し，こうした結果がかえって学生に依頼心を与える原因となったり，また名は貸費なるもその実無きをみるにつけ一部を改める段階に至っている。その為一端専門学科を卒業した者については，本人の判断に任せ，従って学業上特別費用を要する者は，卒業後時宜により検討する程度に止めるべきで，事前に定額以外の特別貸与に関する規定を設ける必要はないとの見解を表明した。

明治9年7月田中文部大輔は，教育制度調査の為米国を巡遊したが，目賀田はこれに随行して，ニューイングランド州及び南方諸州を視察した。ニューイングランド州は彼にとって，留学時代を過ごした馴染みの土地であり，同州の自治制度について研究を行った経験も手伝って今回の随行の仕事を側面から協力に援助する大きな力となり得た。まもなく留学生監督としての実績が評

価されて，明治10年1月12日文部一等属に任ぜられている。またこの時目賀田の要求を容れて，それまでニューヨークにあった留学生監督館をボストンに移すことになった。当時は，日本からの留学生の多くがボストンを中心とした地域に集中したこともあり責任者としての立場にあった彼の適切な忠告に従った結果であった。

移館してまもなく目賀田は田中より送付された明治11年3月6日付の書簡を携えてシーリー学長を訪れている。そして来日予定者との契約やその他の取決め一切についての協議を目賀田を通して勧めて貰いたい旨を伝えた。また明治11年8月15日付の書簡では，リーランド博士との契約，取決め一切は既に終了し，まもなく日本に向けて出発の予定であるとの連絡がボストンの目賀田から報告されていたことを述べている。

Ⅲ）留学生旅費及貸費条規の改革　西南戦争の為，国家の財政は窮乏を極め，その為政府は諸費を緊縮する方針に転じた結果，明治10年9月文部省はボストン在任官目賀田に対して，留学生旅費支給改革の通達を行った。現在及び今後の留学生の汽船旅費の扱いを従来の上等から下等旅費に格下げして支給するという内容のものであった。次いで明治11年8月付を以て，田中文部大輔より新たに貸費留学生条規が送付された。これも財政難に伴う措置の一環として行われたものであって，貸費金額を制限して「貸付ノ金員ハ一ヶ年金千円以下タルベシ」と規定した。万事倹約を迫られる折から，改革規定を遵守せよとの命令には同意しつつも，未だ猶留学期間を残し更に自ら進んで高等の学科を修めようとする学生に対して，多少の貸費増額も認めないとする回答に彼は疑義を挟むことになった。同年10月書面を以て質問を発した。これに対して政府は確答を与えることが出来なかった為，目賀田はその職を辞す決意を行った。

Ⅳ）留学生監督辞任　目賀田はこれまでに留学生監督辞任の申出を二度にわたり行った。その理由として，病気がちであること，年齢が若過ぎること，会計事務が未熟であること，監督が有名無実に近い状態にあること，自らの勉学が思うように進まない等を挙げて，まず明治9年2月矢野代理公使宛てに書面を以て提出している。しかし結果的にはこの申出は実現しなかった。彼の貸費規則に対する柔軟な考え方に反して，その後政府の規則改革は改悪で下等旅費の支給，一ヶ年千円以内の貸費を決定づけた。遂に明治12年に至り再び辞意を決することとなった。これに対して，田中は直ちに聴許することに躊躇し，何等かの方法で目賀田の希望を容れる努力をした結果，帰朝命令とする措置を採った。

目賀田種太郎事跡（在米国）

明治3年（1870年）	8月4日	英国留学
4年（1871年）	10月	欧米特派全権大使岩倉公一行，東京出発
	12月	ボストン到着（同行）
5年（1872年）	夏	アレン学校（ウエスト・ニュートン）修了
	9月28日	ハーバード大学入学
	12月	文部省宛て研究継続願提出
6年（1873年）	1月	欧州への転学出願
明治7年（1874年）	7月	ハーバード大学卒業
	8月	米国留学より帰朝
	9月	文部省八等出仕，准刻課勤務

8年（1875年）	6月	文部省八等出仕，報告課勤務
	7月	米国留学生監督拝命（太政官正院）
	7月18日	米国へ出発
9年（1876年）	3月	留学生貸費規則改正に関する意見書（田中文部大輔へ提出）
	7月	田中文部大輔，教育制度調査の為ニューイングランド州及び南方諸州を視察（随行）
10年（1877年）	1月12日	文部省一等属
	1月	留学生監督館をボストンに移す
	9月	留学生旅費支給改革の通達（国家財政緊縮の為）
11年（1878年）	8月29日	貸費留学生條規
12年（1879年）	2月7日	留学生監督辞表提出
	4月7日	帰朝命令

Ⅲ．アマースト大学体育学科の成立（1860～80年）

1．「Amherst Plan」の特質

アマースト大学第四代学長ウィリアム A. スターンは，その就任演説において，学生の健康を計るべきことを熱心に説いた。『体育は，大学生活に於いて第一の仕事ではないが，それは教育の最も進歩した一つの手段である。私は，体育と美容術（Calisthenics）を正式に之に加えようと考えている。』（1854年11月22日）彼のこうした考えは，機会あるごとに繰り返し主張され，小弱学生の身体を保護し，夭折を予防することを緊要欠くべからざる事業とし，1856年アマースト大学報告書に，「学生の心育と体育とは並行して偏廃すべからざることを述べ，且前途に望ある若干学生の，不健康に由りて半途に廃学するものあるは，実に悲歎に堪へざることを申報し」，また其翌年の報告に，「毎年春季中，数々学生の不健康によりて退校するもの少なからずして，為に他生の勉強力を減殺し，其希望を失却せしむるに至るが如きは，全く其処置の宜しきを得ざるより生ずるものなりと。」これに加えて，「若し適度の体育を毎日学生に課し得たならば，自分は学生の年齢や健康を増すのみならず，愉快に高い気持ちで，社交や研究も出来ると思う」と説明を行っている。

此の年，彼の提案によって，ケンブリッジの（ハーバード大学）Dr. M. ワイマン氏を招いて，学生達に健康論の講義を実施している。また，1859年同氏の報告書中に，「健康法を怠るより病に罹りて，上級中高等学生二名の死去せしを以て大いに感激せられたる由を述べ，且つ恐らくは，他の学生中にも同一の原因によりて，徒に身体を害ふものあるべきことを論ぜり。」ここに至って，直ちに幹事の協議を得て，1860年に体育館が創設されることになった。これが，アマースト大学体育館設立の起源である。其規則は，以後一部改正はみられたものの，敢て大意は，変わることはなかった。

条款

第一条　当場の本旨は，生徒をして捷技，力業或いは筋力を得しめんと欲するに非ず。只其全体を健康に保たしむるの一途にあるのみ。

第二条　格外の事故あるに非，各生徒は都て日々三十分の定時間，該場に出頭すべし。但し少なくも一週間に必ず4日以上たるべし。

第三条　教員は，各生徒に最も適切なる運動を授け，注意して生徒の暴業若くは非常の所業によりて，其名を貧る等のことを抑遏すべし。また運動を行うには勉めて斎しく全体を使用せしめ，偏に一部を専用せしむ可からず。

第四条　体操場の成達は，知育諸科の如く其優劣の点数を定むるを要せずと雖も，出場中各生徒の端正，注意，順良等の事は，教員注意して之を詳記し置き，各生の等位を定むるに当り之を加入して参酌すべし。

第五條　課業時間外に鬱散の為各生徒の好に任せ随意の運動を許すべし。尤も投毬場は定時投毬に用いるの外之を他事に用いるを許さず。且随意の運動と雖も都て体操教員の指揮を受けて行はしむべし。

第六条　該場は必ず日没前に閉鎖し，決して灯火を場内に用いるを許さず。且場中に於て喫煙等の如き不遜の所業を為す可からず。

第七条　体操教員は，適宜の人を選びて之に任じ，該校の教員中に列して該術に関する意見を述べ，且学校の指揮を受くること，他の役員に異なることなし。

として，彼は，1860 年の報告に上記の数条を開陳，且建議して，「余輩が切望する所は，一教職の体育場全局を統轄すべき者を得るに在り。然して其職員たる者は，第一に，老練の体操家にして，生徒の練習に要用なる運動を施すに当り，其実行及容儀によりて，能く之を管理し得べき人たらんことを要し，第二には仮令重症を治すること能はざるも，能く医学に通じ病理を知り，生徒の疾病・健康を監別し，其摂生法を守るや否やを察し，或は留意忠告して，常に身体の強壮を保たしむべき良師たらんことを要し，第三に能弁法は固より体操中の一科にして，其容儀を美にし，言論を善くするの効は姑く措て問はざるも，最良の健康を得しめんが為に，最も欠く可からざるものたるが故に，此職員たる者は，能く能弁法に通じ，躯体，肺臓，発声機等の運動を教授し得べき人たらんことを要す。加之此職員は，啻に体操場を管理するのみならず，身体保全に要用なる生理学を教授し，平常生徒に親接して其感化の勢力甚だ大なる者たれば，其容儀高雅，心情恭敬にして耶蘇教風の高志ある人たらんことを要す。実に斯の如き事業を為さしめば，学校及人民をして無量の鴻益を享けしむ可し。然るときは，余輩は唯米国に斯の如き専門科を開設するの栄を有するのみならず，世界に向かいては，空く費耗し去るべき多量の体力と心力とを援助す

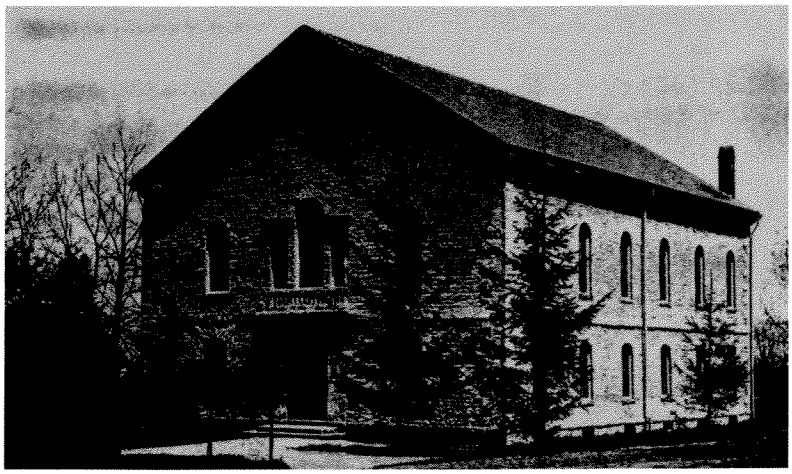

図 1　Barrett Gymnasium, 1860, Amherst College.

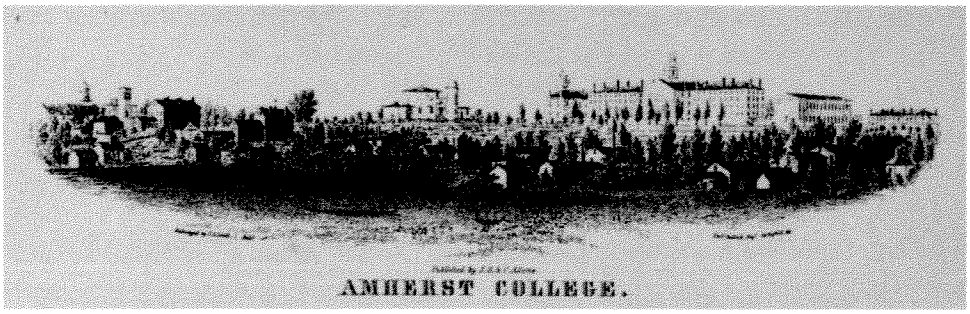

図2 Amherst College, oct, 1859, Catalogue of Amherst College.

ることを得て，始めて教育の真旨即ち人を育成するの大目的を達するに庶幾からんと」(傍線 筆者)

引用がやや冗長となったが，ここにおいて，新設された体操が目指す目的と内容をはっきりと示した。そしてこれを担当する体操専門教員の役割を，以下の様に説明した。

1）運動を指導する優れた能力を有し，
2）医学的，衛生学的見地から健康への適切なアドバイスが可能であり，
3）解剖，生理学が教授できること，
4）優れた人格の備わった人物であること

等を必要不可欠の条件として挙げている。

このことは，新しく設けられた体操教員に対する社会への使命と大きな期待が込められており，何よりも米国にあって，他校に先駆けて体育学科を設置した責任者としての確固たる決意の表われと見做すことができる。

1860年8月6日，学長の提案により評議会は，更に衛生科と体育科を新たに設置することを決議した。直ちに，ジョン.W.フーカーが，初代の教授（健全学及び体育学担当）として迎えられた。ここにおいて，全米初の専門の体育学科が，誕生したことになる。しかし，彼は健康を損ねて，僅か一年足らずで，その職を退いた。翌年8月8日ヒッチコック・エドワードが招かれて，その職に就いた。1860年以前の体育の実態に関しては，『アマースト大学の学生生活』—その組織～会員と歴史（1871年刊行）[7] に若干触れているので，その箇所を引用する。

1826－1860年.

Gymnastic Society.

1826年夏，学生たちは，休みを得て，森を整地することを願い出た。その申し出は認められ，作業終了までに，2日間を費やした。こうして，丸太や，切り株，廃物は撤去され，野外運動の為に，自由に使える立派な森を作り上げた。

数か月後，体操協会が，組織された。その主要な目的は，森の中に，体操器具を設け，財政的に援助することであった。初代の会長に，ジョセフ・ハワード（1827年卒業）氏が，選ばれた。教授会は，協会の計画に協力した。彼等の努力の結果，多種多様な有益な体操器具が，配置され，非常に学生達に，行き届いたサービスが行われ，彼等の健康や幸福に，少なからず貢献した。

この協会の熱意と公共心によって，(10×12フィートの)更衣室も，森の南西の端に建てられた。ここに，学生用のシャワー室も備えられたが，これは後に，焼失した。

1827－28年協会は，ボーリング用フロアの創設を，計画したが，教授会が，この革新を容認しなかった。度々，協会の前のチャペルにおいて，「体育」についての講演が行われた。

協会は，1859－60年に，現在の体育館が建設されるまでは，存在していた。

学生の自治で，体操用具は，時々増設され修理されていたが，その後，森から取り除かれた。

アマースト大学カタログ[8]によれば，1859年10月，体育学科開設の前年の模様を次の様に報告している。

Gymnasium.

現在，建築中の—この建物は，冬の学期初めまでには，工事が完了するであろう。石造り，高さ70フィート，幅50フィート，地下室を備えた，2階建てで，総工費は，凡そ7,000ドルである。この建物は，大学の小さな森に通じており，体育に，好都合な機会を供えている。

1867年.

Physical Culture.

バレット体育館は，ノーザンプトンの故ベンジャミン・バレット博士に敬意を表して名付けられた。御影石づくりの建物で，ボーリング場と，健康，レクリエーション，並びに学生全員の真の発達にとって不可欠な体操用具を備えている。この体育館は，昼間自由に練習する学生達のために，開かれており，所定の時間に各クラスが出席し，体育科教授の指導のもとに運動するよう要求される。クラスの運動は，一般に公開されている。(1874年　The Gymnasium.)必修の運動はほとんど全く音楽で拍子をとって，行われる。軽体操から成り立っており，骨の折れるより困難な体操は，全く学生の自由にまかされている。身心共に健康な誰でもが完全かつ安全に行えないような努力は，いかなる学生にも要求されない。

体育科の教授は，教育を受けた医者であり，できる限り学期中に，市街地の学生の身体的条件

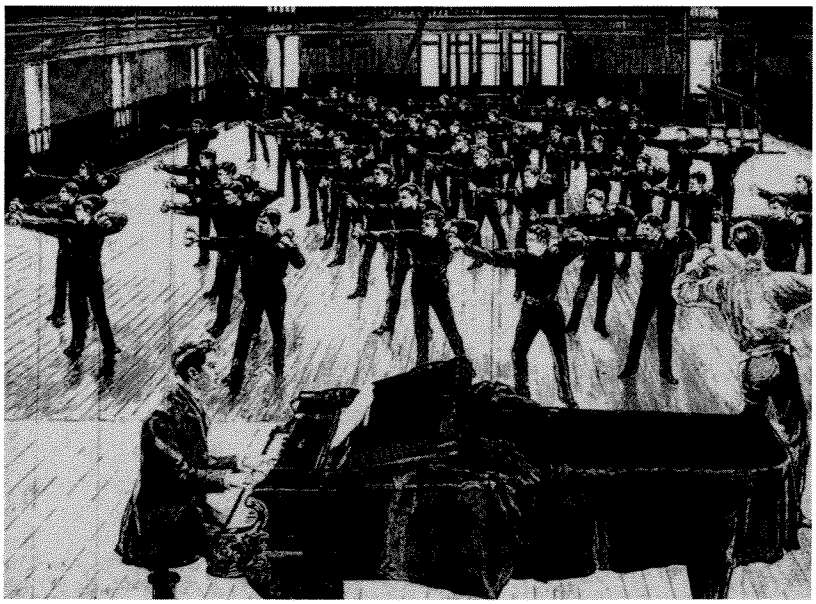

図3　The Pratt Gymnasium at Amherst College. Feb 21, 1885. Harpers Weekly.

について精通するように期待されている。すべての学生は，彼に無料で相談することが許されており，(教授から真の資格は与えられていないが)クラス幹事は，彼等が病気による出席を認めた。

一定の期間をおいて，各々の学生の念入りな活力統計表が作成され，大学のメンバーは，以前自分と同じコースの学生達との比較をすることができた。

この科は，過去6年間，上首尾の運営を行ってきた。その好結果は，計画立案者達の予想を上まわるものであった。(1861年　New Department. 同様な記述あり)

1863年には，正課の体育に加えて，新たに軍事教練が付け加えられた。現在行われている軍事教練は，旧式歩兵銃や一般用機械装置を用いた陸軍教練からなっている。(1863年　New Department.)

ヒッチコック教授の体育に対する考え方は，第三代学長でもあった父ヒッチコック・エドワードと共に著した『専門学校其他諸学校に於ける生理，解剖学の初歩』において，『筋肉発達の現象』の中に，これをみることができる。彼は，1878年のマサチューセッツ衛生総会に報告するために，起稿したもので，主としてアマーストにおいて彼の指導監督の下に行っているアマースト式(Amherst Plan)の重要な部分を述べたものであった。『その方法は決して独創のものでもなければ，筋肉発達の上に世上の注意を喚起しているという訳でもない。それはただ普通の身体を普通の健康状態にする目的に過ぎない。従って精神は常にあらゆる仕事に行きわたり，体力は大学の日常の学生生活の上に働き，同時に永い人生の労働に対しても屈託しない。同時に其方法は精神的にも身体的にも学生に喜ばれ，所謂倦怠を覚えたり，機械的であったり，強過ぎたりする様なことがない。重要な点は，学生はその級に加わり一週間4日の定められた時間に，体育館に行き，音楽に合わせて自分のやるべき組織的に組み立てられた体操をやる。各級は級自体で其役員をつくり，体操は普通，軽体操と呼ばれる種類のもので，大部分は極めて軽い木製の亜鈴を各手に持ち，音楽に合わせてこれを行う。特に冬季には，体育館の床上で，級が全体となってランニングを行った。2，3の行進遊戯もまた級として行われた。そうしてこの体操の課程は，健康な全校の学生に対して行われた。』

しかしこうしてヒッチコック教授を中心として，確立されたAmherst Planも，その実際の効果を広く世に問われることとなった。体育学科開設以来，行ってきた体育実践を，次の2つの方法で明らかにしょうと試みた[9]。一つは，疾病生徒の人数調べを行ったことである。疾病簿を作成し2日以上引き続いて欠席した生徒の人数を記録することとし，第1級生徒から第4級生徒までの全校生徒数と病欠の生徒の割合を算出し，運動効果による病気の生徒数の減少を示した。その結果，10年或いは15年以前の生徒の健康と疾病をもとに今日の生徒に比較すれば著しき差異のあることを実証した。もう一つは，活力統計表を作成したことである。生徒の入学後，第一年に2回，以後毎年一回ずつ各生徒の年齢，身長，体重，両手の達する長さ，胸の周囲(充満，空虚，中等)肘の周囲，肺臓の量及び力量を測定し，毎年この様に凡そ3,000種類の条項を作成し，これを原簿に記録し，後年之を他の結果と比較を行う。運動によって，四支筋肉を増大強壮にし，また肺臓の量と力とを増加させる結果を生じた場合，その年の生徒の体力の標準を示し，他の生徒をその標準値に近づける到達目標とした。

表1の疾病一覧表から，この当時学生の間に流行していた病気として，ヂフテリア，肺炎及び風邪，腸炎等が挙げられる。また比較的長期間治療を要した病因として，平常の膿傷，横胆(5～6週)等があった。

表1 Sick List, for 1862-3.

Name of the Disease.	Average and Actual Duration of Disease.	Number Disabled.
Diphtheria, ...	10 days, (average)	9
Inflammation of Lungs, and Colds, ...	13 〃 〃	7
〃 〃 Bowels, ...	$9\frac{1}{2}$ 〃 〃	2
Face Ache, ...	4 〃 (actuál)	1
Injured in Gymnasium, ...	3 〃 〃	1
〃 out of ...	7 〃 〃	1
Palmar Abscess, ...	5 weeks, 〃	1
Axillary 〃 ...	14 days, 〃	1
Sciatica, ...	5 〃 〃	1
Pleurisy, ...	8 〃 〃	1
Bilious Fever, ...	13 〃 〃	1
Jaundice, ...	6 weeks, 〃	1
Diarrhea, ...	6 days, 〃	1
Colic, ...	5 〃 〃	1
General Inability, ...	3 〃 〃	1
15 Causes.		30 Cases.

TIME OF SICKNESS. —September, 2; October, 1; November, 3; January, 4; February, 2; March, 8; April, 1; May, 9. Total, 30.

表2 Disabilities Arranged by Classes for the Two Years Past.

	Seniors.	Juniors.	Sophomores.	Freshmen.	In the proportion of
1861-2	7	4	11	22	1 to 5.340
1862-3	2	4	12	12	1 to 5.933

表3 Vital Statistics of Amherst College, 1862-3.

	Age, in Years.	Weight, in pounds.	Height, in feet.	Cheat Girth in inches.	Arm Girth in inches.	Forearm Girth in inches.	Lung Capacity, cubic inches.	Power of Lungs.	Weight Lifted.
Seniors, -	22.650	142.781	5.680	36.203	11.734	11.109	277.483	294.129	14.379
Juniors, -	22.500	147.530	5.984	36.320	22.630	11.050	322.780	279.540	12.700
Sophomores,	21.117	137.577	5.713	35.279	11.375	10.663	257.174	308.100	11.170
Freshmen, -	20.004	141.964	5.599	35.008	11.456	10.887	245.792	302.603	11.866
College average, -	21.580	142.713	5.744	35.712	11.548	10.927	275.807	296.093	12.528

表2は，過去2年間における学年別障害者数を示したものである。

表3の活力統計表にみられる様に，9項目中(年齢，体重，身長，胸囲，上腕周径，前腕周径，肺活量，肺のパワー，重量挙げ) 5項目に漸増がみられる。凹凸はあるものの，フレッシュマンより上がっているものは，3項目，同様に下がっているものは，1項目みられた。その特徴として，特に胸囲が大きく，前

腕囲が増し，筋肉が増し，かつ肺活量が大きく増していることが判る。

以上が，アマーストプランが実施されて十数年を経過した時点における実態である。1877年9月，ヒッチコック教授が，シカゴのアメリカ国民保険会社の集会で行った演説に，彼がこのプランを通して，最も強調したかった核心部分に触れて，「諸学校において，体育を設置しょうとする場合，普通の疾病表を作成し，後年これを活用して，体育が有効に機能しているかどうかの判断材料とした。アマースト大学で，体育が教育上必要不可欠なものと考えて発起して以来，最も満足のいく結果が得られたことは，学生たちが極めて健康になったことであった。」と述べている。そしてこれまでの経験からして，以下の点を体育を成功に導く重要な要件と捉えている。①強促法に従って行う。（各生徒が体育に欠席することを許可しない。）②少力運動（軽運動）を各種運動の中心として位置づける。③必要な器具・施設等を整備した体育館を建設する。これに合わせて教室，室内競技施設（ビリヤード台）等を付設する。④各クラス毎にユニフォームを着用する。⑤活力統計表を大いに活用すること等をその条件として挙げている。

アマースト大学体育学科では，開設以来，以上みてきた様な基本的な考え方とそれに基づいた方法に従って独自な方式を確立していくことになる。

2．「Amherst Plan」の担い手たち

a．体育学科創設とヒッチコック・エドワード

「体育学科」が創設されて，2代目の教授として迎えられたヒッチコック・エドワード[10]は，1861年から彼が亡くなる1911年までの間，体育学担当の教授の職にあった。アメリカの大学における最初に確立した体育科の指導者であり，また実際に大学のカリキュラムにおける体育科の創設者でもあった。アマーストで試みられたこの方式は，全米はもとより日本へも広く普及していった。アマースト大学は，体育を大学教育に必修教科として最初に位置づけた大学であった。1860～80年の間のアマースト大学体育学科の教員組織及び同学科の研究活動については，史料2，3に示しておいた。

すでにみてきた様に，1826～30年，ついで1850年に入って各大学に導入された体育は，十分な施設や有能な指導者を持たないままの未整備な状態からのスタートであった。

ヒッチコックは，マサチューセッツ州アマーストに，1828年5月23日，第3代学長で，著名な地質学者を父に持つ家庭に生まれた。1849年アマースト大学を（文学士）卒業後，引き続いて同大学で，文学修士の学位を取得した。医学の学位は，ハーバードから得ている。そしてその後4ヶ月間，医学，博物学，比較解剖学等の研究の為，パリ，ロンドンに渡った。ロンドンでは，当時，大英博物館の顕著な比較解剖学者であったリチャード・ローエン卿の私設研究員であった。彼のもとで，ヒッチコックの仕事は，学者としての評価を不動のものとした。何故ならば，比較解剖学は彼の最も得意とする分野であったからである。教授に就任した時，学生の健康に関わる科目を特別に指導することを準備し，当初は体育（実践）を欠いていたが，まもなくこの弱点を克服した。

ヒッチコックがアマーストで発展させたプログラム[12]は，広範にわたる健康管理・指揮・教育・科学的測定を全学生に対して必修の教材としていた。それは体育のアマーストプランとして，国内はもとより国際的に知られるようになった。大学の4つのクラスが各々一週4時間，教授の監督の下，30分の運動を義務づけられた。学生達は，ユニフォームを纏い，各自のクラスと小隊の

史料2　Amherst College－The teaching staff of the Department of Physical Education and Hygiene[11)]

President	就任年次	氏名・学位・(出身校)	担当科目・身分	退任年次
↓				
Humphrey, Heaman	1825	Hitchcock, Edward, D.D., LL.D.(Yale),	Chemistry and National History. prof.	1845
	35	Alfred Charles Post, M.D.	Anatomy and Physiology. prof	1843
↑	1845	Hitchcock, Edward, D.D., LL.D.(Yale),	Natural Theology and Geology. prof.	1864
↓ Hitchcock, Edward ↑	1854	Clark, William Smith, PH.D., LL.D.	Chemistry, Botany, and Zoology. prof.	1858
↓	1860	John Worthington Hooker, M.D.(Yale),	Theory and Practice of Medicine. prof.	1861
Stearns, William Augustus	61	Hitchcock, Edward, M.D., LL.D.	Hygiene and Physical Education. prof.	1911
	1869	Barlow, Elisha Hubbard, M.A.	English Language. Instructor.	1870
		Kittredge, Alvah Baylies, B.A.	Gymnastics. Instructor.	1870
↑	1874	Alfred Ely, A.B.,	Gymnastics. Instructor.	1875
↑	76			
Seelye, Julius Hawley	1883	Hitchcock, Edward, Jr.,M.D.	Physical Education. Instructor.	1884
	84	Seelye, Hiram Henry, M.D.	Physical Education. Instructor.	1896
↑	90			
Gates, Merrill Edwards	92	Nelligan, Richard Francis, (Boston Normal School of gym.),	Gymnastics and Athletics. Instructor.	1906
	96	Phillips, Paul Chrysostom, M.D.	Hygiene and Physical Education. Assistant prof.	1899
↓	99	Phillips, Paul Chrysostom, M.D.	Hygiene and Physical Education. Associate prof.	1908
↑	1906	Nelligan, Richard Francis	Hygiene and Physical Education. Assistant prof.	1910
Harris, George	10	Pery Robart Carpenter, M.A.	Hygiene and Physical Education.	
↓				

キャプテンを選んだ。彼等は，ヒッチコックによって，体育館での，美容術と演習の技術を訓練されていた。その運動は，軽い木製の啞鈴による美容術と，ピアノの音楽に合わせて一斉にドリルを繰り返す内容から構成されていた。全てのクラスの一部は，自由な運動時間にあてられていた。彼は，クラスのこのリクレーション的な部分を，学生の気分転換の為の極めて重要な時間として捉えていた。また大学の理事会も，新設の体育学科の教授に，学生の健康管理について，一番多くの期待を持って迎えた。ヒッチコックは，これに対して最高の技術と成果で答えた。彼は，学生達に，規則的に身体検査を課し，詳細な健康記録をとった。各々の学生は，各自の健康管理や健康相談の為に，ヒッチコックを訪ね，一方彼は毎日病気の学生の部屋を訪問した。彼の夢であった学生の診療所は，1897年になって実現している。

ヒッチコックは，たった一冊専門領域に貢献した。これは，解剖学と健全学の教科書であった。しかし，彼の小冊子，論文，教科書，レポートに関する一覧表は，アメリカ体育レビューに，8ページにわたって掲載されている。彼は，サージェント，アンダーソン，ハートウェル，ギューリック等と並んで19世紀の体育界の重要な研究者の一人に挙げられている。彼の論文や新しい論説はアマーストプランに記述されているけれども，他のアメリカの大学の体育の発展に多くの影響を与えた。中でも彼の指導した3人の学生　エドワードM.ハートウェル[13)]，ワトソンL.サベージ，ポールC.フィリップは，アメリカの体育に全国的に貢献をした。日本政府は，アマースト大学に同校のプランを取り入れるために，体育教師の招聘を依頼した。ヒッチコックの別の教

え子であったジョージA. リーランドが選任されこの要請に応えることになった。そして3年間日本で過ごした。彼は，わが国で近代体育の創設者として信用を得た。

史料3 Books・Pamphlet・Program (1860－80)[14]

1862 ・「Report of the Program of Physical Education and Hygiene to the Corporation of Amherst College, July 5th.」
・「Report of the Progress of Physical Education and Hygiene to the Trustees of Amherst College.」
63 ・Edward. Hitchcock『Reminiscences of Amherst College, historical scientific biographical and autobiographical, of other and wider life experiences.』
・ 〃 〃 『Report of the Professor of Physical Education and Hygiene to the Trustees of Amherst College.』
・Barlow, Elisha Hubbard『Manual of Gymnastic Exercises.』(First edition)
1866 ・Barlow, Elisha Hubbard『 〃 〃 』(Second edition)
・「Statistics in the Department of Physical Education and Hygiene at Amherst College for the Past Five Years.」
・「A Paper with Tables, prepared for the American Antiquarian Society, on The Decrease of the Relative Number of College Educated Men in Massachusetts during the Present Century.」
69 ・Nathan Allen『Physical culture in Amherst College.』(First edition)
1870 ・「A Program of an Exhibition, with Physical Statistics of the College.」
71 ・「Program of an Exhibition, of the Required Physical Exercises as Practiced in College, with Tables of Vital Statistics and Disabilities」
・「Program of the Sawyer Prize Exhibition, with some Physical Items.」
1872 ・「Program of Commencement Exhibition with Health Items gathered during the Past Eleven Years.」
73 ・Nathan Allen『Physical culture in Amherst College.』(Second edition)
・「Program of an Exhibition in Gymnastic Training given by the Junior Class, etc., with a Table of the Ages and Weights of the Senior in Amherst College for the years 1862-1873. (July 9th.)」
・「Program of a Gymnastic Exhibition by the Students of Amherst College, for the Sawyer and Washburn Prizes, with some vital Statistics of the Students of Amherst College for the Ten Years, ending December 17, 1873」
1874 ・「Program, Commencement, 1874, an Exercise in Light and Heavy Gymnastics given by the Junior Class, July 9th, with a Description of the Equipment and Work of the Department, and some Statistical Items.]

- 「Program of the Eleventh Anual Gymnastic Exhibition in Amherst College for Washburn Prize, in College Hall, December 12th at two P.M., Sawyer Prize in Barret Gymnasium the same Afternoon, with some of the Anatomic and Physiological Constants of a Student in Amherst College, determined by 4311 observation.」

1875
- Edward. Hitchcock 『Transactions of the Hampshire Agriculture Society of Amherst, Mass.』
- Barlow, Elisha Hubbard 『Manual of Gymnastic Exercises.』 (Third edition)
- George Adams. Leland 『Manual of Gymnastic Exercises, arranged on hygiene principles and adapted to music with an illustrated dumb-bell drill arranged by.』
- 「Program of The Twelfth Annual Gymnastic Exhibition for Washburn and Sawyer, Prizes, with The Maxima and Minima of the Physical Constants of the Students of Amherst College for the Fourteen Years, from 1861-62 to 1875-76.」
- 「An Exercise in Gymnastics as Practiced by the Junior Class, with some Statistical Items Relating to Graduates.」

76
- 「Physical Exercises at Commencement Week, with Viability of Amherst College Graduates.」
- 「A Part of the Course of Instruction given in the Department of Physical Education and Hygiene, etc.」
- 「The Thirteenth Annual Gymnastic Exhibition, etc., for the Washburn and Sawyer Prizes, with a Table of Anthropometry, compiled from 19638 Observations of 1089 Students.」

1877
- Edward. Hitchcock 『Relation of the Student-Life to Health and Longevity』
- Edward. Hitchcock 「Hygiene at Amherst College.」
- 「Physical Exercises in Commencement Week, with Statistical Tables.」
- 「The Fourteenth Annual Gymnastic Exhibition, etc., for the Washburn and Sawyer Prizes, with Statistical Items of Anthropometry, Sickness, etc.」
- 「A Part of the Course of Instruction given in the Department of Physical Education, etc., an Outline of Lectures, etc...」

79
- 「A Gymnastic Exhibition, etc., for Washburn and Sawyer Prizes, with Vital Statistics Graphically Charted.」
- 「Amherst College Gymnastic Exercises by the Junior Class, etc., with Data and Statistics.」
- Edward.Hitchcock 「The Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College.」
- Nathan Allen 『Lecture, The Education of girls, as connected with their growth and Physical Development.』

1880
- Edward. Hitchcock 「An Abstract of Lectures on Health, to the Freshmen of Amherst College.」

- 「Amherst College Gymnastic Exhibition by the Junior Class, with some Results of the Bodily Measurements of 185 Students, etc.」
- 「A Gymnastic Exhibition for the Washburn and Ladd Prizes, February 14th, with the Average Result of Measures of 1391 different Students, etc.」
- 「A Part of the Course of Instruction given in the Department of Physical Education and Hygiene, etc.」

b．三人の後継者

ここで取り上げるのは，わが国が，体育導入に関して種々調査，検討した結果，アマースト方式に照準を絞り，当時日本側の責任者であった文部大輔田中不二麿とアマースト大学学長シーリーとの間で直接交渉が始められた時期に限定して，その当時わが国に派遣され指導にあたる可能性のあった人物について検討[15]を行う。そして複数の候補者の中で，年齢，専門領域，(当時の)地位・身分等の理由によって，最終的にリーランドに絞られた経緯を明らかにしていく。ここでは，以下3名の人物に絞って，検討を行っていく。

1）Nathan Allen (1813−1889). class of 1836.
2）E.H. Barlow (不詳). class of 1866.
3）G.A. Leland (1850−1924). class of 1874.

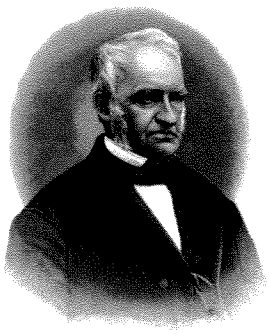

図4 Nathan Allen
『Physical Development』(1888年) より

1）Nathan Allen[16]

略年譜

1813年4月13日	モーゼス，メヒタブル夫妻の間に，プリンストンに生まれる
36年	アマースト大学卒業
37年	アマーストアカデミー卒業
39年	アマースト大学文学修士
41年	ペンシルバニア大学医学博士号取得
1842年	バーモント州キャッスルトン医科大学名誉博士号取得
56年	アマースト大学理事に選出
72年	ロンドンの国際会議（監獄制度の改正他）に出席
73年	アマースト大学法学博士号取得
74〜80年7月	精神異常委員会理事に選出
41〜89年	ローウェルで開業医
62〜89年	マサチューセッツ州慈善事業委員会委員，奨学金試験監督

ネーザン・アレンは，1836年アマースト大学を卒業した後，引き続いて，1839年には，同大学で文学修士の学位を取得した。その後，ペンシルバニア大学において医学博士号を得ている。

アレン博士は，衛生学の分野では，すっかりその見識の広さが定着していた。国民の間に，衛生問題の著者としてアメリカと同様にイギリスでも評判になった。専らコラムニストとしてその

仕事を受け持った。彼は各種団体のメンバーとして活躍したが，中でも米国社会科学協会の創立者の一人であり，しばしばこれらの団体に論文や報告を寄せた。アレン博士は，広く配布される多くの演説やパンフレットの形で論文を書いた。彼の行った最後の仕事の大半は，これまでの仕事を集大成し，『身体の発達』(1888年)という表題で，一冊の本にまとめた。(史料4，No.18参照) 以下は，彼の多くのパンフレットの内の一部である。(史料4及び5) 彼はまた特に，我々の教育機関における体育に関心を示した。もし彼が教父でなければ，博識な監督・提案・不変な保護によってある程度の成果を治めた体育のアマースト方式の初期の独創的な計画者の一人になったと思われる。一般にこの様な体育が必要とされる以前に，彼の提案した方法は，アメリカ中のほとんど全てに採用されるよう指導されることをすでに説いていた。史料4によれば，彼の体育に関する業績は，No.6～8の『アマースト大学の体育』1869年，No.16『アマースト大学の体育』1886年及びNo.17の『アマースト大学体育の確立』1887年等に，代表される様に数多く見られ，彼自身の体育に対する関心の深さが端的に表れている。これまでアレンに関するこうした業績は，わが国の体育史においてほとんど紹介された例はなく，史料4　No.6『アマースト大学の体育』(1869年) が唯一取り上げられているのみである。またPamphlets目録　No.11は女子教育一成長と身体の発達の関連と題した講義をまとめたものであり，この当時女子の教育について，極めて重要な指摘を行っている。1856年アレン博士は，アマースト大学の立法部の理事に選出され，生涯その役割を担った。とりわけ1860年，理事として学生の健康問題を解決するための重要な仕事である体育学科設立のために指導的役割を果たした。彼ほど理事会に忠実に尽くしたものはいなかった。1873年大学は，彼に法学博士の称号を授与した。また彼は，組合教会派のメンバーであり，日曜学校の校長も勤めた。彼の研究生活の早い時期には，しばしば日曜学校の代表者会議，公的なあらゆる種類の宗教集会等に出席し，最も価値のあるその会議で読まれている新聞に原稿を寄せた。最後まで特に，教会の布教活動に興味を持った。

史料4　Nathan Allen Works[17)]

1. The opium Trade;
   including a sketch of its history, extent, effects, etc. as carried on in India and China. 1836. pp.80

2. Medical Problems of the Day.
   The Annual Discourse before the Massachusetts Medical Society, Jun 3, 1836. pp.92

3. Population; its LAW of Increase by Nathan Allen.
   Read at the Meeting of the Western Social Science Association, in Chicago, Nov 12, 1868. pp.32

4. Papers and Proceedings of the National Association for the Protection of the Insane and the Prevention of Insanity at the stated meeting held in N.Y. city Jan 20, 1869

5. The Intermarrige of Relations.

from the Quarterly Journal of Psychological Medicine and Medical Jurieprudence, for April, 1869. pp.56

○6. Physical Culture in Amherst College.
Prepared by the request of the trustees. 1869. pp.46

◎7. Physical Culture in Amherst College.
Prepared by Request of the Trustees. 1869. pp.46

◎8. Physical Culture in AMHERST COLLEGE.
Professorship of Hygiene and Physical Education,Established 1860.
Edward Hitchcock, M.D., Professor 1869. pp.46

□9. The Physiological Laws of Human Increase.
extracted from the transactions of the American Medical Association. 1870. pp.27

□10. Physical Degeneracy by Nathan Allen, M.D.,
Reprinted from the Journal of Psychological Medicine, Oct, 1870. pp.40

11. An Address delivered Sept, 19, 1871.
Annual Exhibition of the Farmers Club, Princeton. pp.38

12. State Medicine, IN ITS RELATIONS TO INSANITY, by Dr.Nathan Allen,
Read at the Meeting of the American Social Science Association, Detroit, May 13th, 1875. pp.31

13. The Treatement of the Insane, by Dr. Nathan Allen,
Read at the Meeting of the American Social Science Association, SARATOGA, Sept 6th, 1876. pp.20

14. Claims of the Sick Poor.
Paper read before the Middlesex North District Medical Society, Jan 31, 1877. pp.8

15. Changes in New England Population.
Read at the meeting of the American Social Science Association, Saratoga, Sep 6, 1877. pp.16

○16. Physical Culture in Amherst College.
Read at the Tenth Annual meeting of the American 1886 Academy of Medicine at Pittsburg. Penn. oct 12, 1886. pp.16

○17. The Establishment of Physical Culture in Amherst College.
Dec, 29, 1887. pp.12

□18. Physical Development or the Law Govering the Human system by Nathan Allen
Boston 1888 pp.348
Lee and SHEPARD PUBLISHERS

史料5 Pamphlets[17] BY N.ALLEN

1. The Law of Human Increase, or population lased on physiology and psychology.
1868 pp.58

2. Lessons on Population suggested by Grecian and Roman History, Boston. 1871 pp.163.

□3. The Relations between Sanitary science and the medical Profession. pp.16

□4. Hereditary Disease. pp.15

5. The Law of Longevity with Special Reference to Life Insurance. 1874 pp.16

6. Report of the Commissioners of Lunacy, to the commonwealth of Mass. Jan, 1875 pp.80

□7. The normal standard of woman for propagation. pp.39

□8. The Phrenological Journal ILLUSTRATED. 1878 pp.6

9. The Prevention of Disease, Insanity, Crime, and Pauperism. 1878 pp.25

10. Studies on the Laws of Life. 1877 pp.32

○11. Lecture; The education of Girls. 1879 pp.32

□12. The Sanitarian: Laws of Inheritance. 1880 pp.6

□13. Epidemics.

14. Supervision of Lunatic Hospitals. 1880 pp.16

15. Church Fellowship. 1880 pp.10

16. The Law of Human Increase. 1882 pp.10

17. The New England Family. 1882 pp.24

18. Influence of Medical Men. 1882 pp.6

19. Explanation and Defence of the Preceding Paper. 1883 pp.4

20. The Prevention of Insanity. 1883 pp.23

21. Our Gallory. 1884 pp.4

22. Laws of Maternity. 1885 pp.7

□23. Laws of Inheritance. 1886 pp.5

◎24. Physical Culture in Amherst College. 1886 pp.16

25. Studies on the Laws of Life. 1877 pp.32

※史料番号左の○印 Physical Education に関するもの
〃 □ Hygiene に関するもの
〃 ◎ 重複しているもの（すべて Physical Education 関係）

以上みてきた様に，アレンは衛生学及び体育学の分野において，数多くの優れた業績を著してきた。早くから理事として大学の運営に携わったこともあり，教育者として体育学科創設に力を発揮した息子ヒッチコック教授とは自ずと異なった進路を歩む結果となった。数多くの彼が行ってきた仕事は，常に大学を運営する立場で主張され，これらの分野に多大の影響を与えるものであった。

2）Elisha Hubbard. Barlow

略年譜

1863年	『体操運動必携』初版
64年	『Declamations』（演説の部），second prize E.H. Barlow
66年	『体操運動必携』第二版，class captain，『Shepard mineralogical Prizes』（鉱物学），second prize
1869年	ラファエット大学博士号取得
69～70年	アマースト大学講師（Williston Instructor in English）
70年夏～秋	ボストン在住
1871年1月	ラファエット大学教授（修辞学，演説法兼体育学）
75年	『体操運動必携』第三版

1883年　　マサチューセッツ農科大学講師（Instr. in English）

エリシャ・ハバード・バーロウを詳しく知る史料はそれ程多くないが，この時期に活躍した人物として特筆に値する。とにかく彼について判っている事実については上述のとおりであるが，とりわけ彼がアマースト大学に入学をした時期にあたる1863年に著した『体操運動必携』がある。在学中の諸活動をみても，多分野で大いに活躍し，4年生ではクラスキャプテンを務めている。指導教授であったヒッチコックにおそらく勧められて着手した仕事であろうと思われるが，若くしてその才能を十分に発揮している。アマースト卒業後は，ペンシルバニア州イートンにあるラファエット大学で博士号を取得している。1870年早くも母校であるラファエット大学から教授として招かれている。彼が位置づいた専門分野は，学生時代からその優れた才能を覗かせていた修辞学(雄弁術)，演説法及び体育学においてであった。やや遅れて翌年1月に正式にその職についている。(1866年クラス記録に掲載) 1875年に『体操運動必携』第三版が印刷された。この表紙には，E.H. バーロウ教授，1866年アマースト大学クラスキャプテン，現ペンシルバニア州イートン，ラファエット大学教授編集，アマースト大学1874年クラスキャプテン，G.A. リーランド，啞鈴体操分担執筆と記されている。この著書は，日本の田中不二麿宛てにヒッチコック・エドワードより贈られたそのものであるが，明治10年5月文部省交付の印が付されていることから，アメリカですでに実践されていた体育をわが国に導入するにあたって本書が大いに参考にされたと見做される。この点に関しては，先行研究で今村がすでに指摘しているが，「本書は表題は上掲(アマースト大学体操便覧) の写真の通りであるが，内容はバーロウ教授編集の体操便覧でタイトルも Manual of gymnastic exercises, 1875. となっており，その表紙のそれと異なっている。」とだけ記して，詳しい説明は行っていない。すでに述べたように，ヒッチコックとバーロウの関係は指導教授とその学生の間柄にあり，ヒッチコックがバーロウに命じて刊行させたその著書もアマーストプランの一部としてまとめた結果『アマースト大学体操便覧』1875年に一括収録されたものと考えられる。また中表紙に記されたバーロウ教授の身分を誤って，アマースト大学教授として記述しているが，この時点で彼はすでにラファエット大学教授に転じていたことをはっきり指摘しておく必要がある。この年バーロウは，E.A. シェルドン(オスウィーゴ州立師範学校校長)と共著で，『教師必携　読書教授』も著した。略年譜から推測すると，アメリカから日本へ体育教師を派遣する時期に彼は36歳前後で年齢的には最も相応しい年齢に達していたと考えられるが，すでにラファエット大学で確固たる地位を得た後であったこと，更に問題点を指摘するならば，彼は医学教育を受けていなかったことが揚げられる。創設以来，アマーストでは，体育教師の資格を体育学兼衛生学を担当し得る者という暗黙の規定が働いたかもしれない。その様な理由から，日本行きの候補者からは外れていったと見做される。

3）George Adams.Leland

略年譜

1850年9月7日　ジョセフ・ダニエルズとメリー・プリンプトン夫妻の間に，ボストンに生まれる
74年　アマースト大学クラスキャプテン，同大学卒業
74～78年　ボストンラテン学校卒業，ハーバード医学校卒業
1877年1～6月　ボストン市立病院インターン

1877年6月～78年6月　同　市立病院神経病，腎臓病科の内科医として勤務
78年　ハーバード大学医学博士号取得
〃　7月1日　留学生監督目賀田種太郎とボストンで日本行きの契約を行う
1878～81年　日本国東京文部省雇体育学兼健全学教師，その間医師兼業
81～82年　ヴィーナ，ハイデルベルグ留学
82年～　ボストンで内科医兼外科医開業
86年　ボストン市立病院にて耳鼻咽喉科助手
1888年　〃　耳鼻科
93年　ベルリン留学
94年　アマースト大学文学修士号取得

わが国が正式に米国より体育教師招聘に踏み切った時期は，リーランドはアマースト大学を卒業しハーバード大学において医学博士の学位取得の最中であった。折りから1875年，在学中特にクラスの体育活動に才能を発揮し，4年次にはクラスキャプテンをも務めた経験を存分に生かしバーロウ教授との共著で，『アマースト大学体操便覧』の啞鈴体操の部分を分担執筆した。この来日直前の本書の執筆が本人自身にとってもまた周囲の人々にとっても真に重要な意味を持ったと考えられる。それはこれまで行ってきた体操実践がかなり整理整頓され，必要に応じて指導，監督ができるレベルにまで到達していたことを意味していた。おそらく大学側から彼に対して熱心な誘いが繰り返し行われたことは想像するに難くない。次ぎに体育に人一倍強い興味と関心を持っていたことが挙げられる。学生時代の活躍振りについてはすでに指摘したが，ファーロウの追憶文に述べられている様に，「卒業後も彼は体操に対する関心を持ち続け，体操に秀でたものに毎年賞金を提供することを申し出て，賞金を受ける価値があると判断されたクラスに授与されるようにしました。このリーランド賞は，学長が十年前に競技に肩を入れ，体操のコースを廃止するまで，約四十年間にわたって与えられてきました。」

アマースト卒業後も一貫して母校の体育の発展を思い賞金を提供してきた程のリーランドであったが，5年間の海外留学生活を終えて帰国するとそれ以後，体育，スポーツに関する表立った活動は一切みられなくなる。彼の経歴に明らかなように，耳鼻咽喉科の外科医として名声を馳せ全米はもとより国際的に知られた学者として大きく飛躍していくことになる。他の理由としては，経済的な面が指摘される。彼は兄弟も多く，経済的には余り裕福ではなかった。既にハーバード大学医学部時代には，ボストン市立病院に務めていた事実からもそのことが伺える。また来日直前に，ボストンのリチャードR.ヒギンス博士の娘アリス・ピアースと結婚したが，未知の国に旅立つ不安と共に経済的に自立を迫られる状況が生じたことも否定できない事実であろう。最後に将来に大きな夢を抱き，新天地で自らの力を思いきり試してみようという強い意志が働いていたことも否めない事実であろう。彼は医学博士号を取得して間もない時期でもあり，未だはっきりと自分の専門領域も決まっていない自由な立場にあったので，思い切って未知の世界，日本で近代体育の指導者として自分の力を試してみたいという気持ちも少なからず働いたと考えられる。それは近い将来欧州留学のステップとして，既に彼の中ではその将来計画の一部として完全に位置づけられていたともいえるものであった。

Ⅳ．リーランド招聘に至る経緯

ここでは今回新しく発掘された田中不二麿からアマースト大学シーリー学長に宛てた3通の書簡をもとに，リーランドをわが国に招くに至った詳しい経過を辿ることにする。

すでに，Ⅰ．の箇所で史料の全体については，略述しておいたが，先行研究においても，1879年4月10日付，リーランド博士赴任後の活動報告及びわが国体育の実情報告を伝える書簡(史料1の⑧) は取り上げられてはいるが，それ以前の3通（史料1の⑤〜⑦）については，これまで一切不明のままであった。その意味では，これまでの疑問を解明する重要な手がかりとなる史料といえる。

これらの書簡は，田中一行が初めて目の当たりにしたアマースト方式の体育，体育を導入するに至った経緯と意図，正式な要請，具体的な契約の方法，わが国体育の展望等を含む内容に触れるものであった。

以下3通の書簡の具体的内容に触れながら，考察していく。

1．1877年2月9日付書簡

1877年2月9日
日本国東京
文部省

J.H. シーリー博士殿

拝啓

私達一行は，24日間の長旅を終えて，先月8日に無事こちらに（東京　筆者注）到着致しました。そして帰朝後は旅の疲れも回復しつつあることをお知らせ申し上げます。

私にとりましては，今回のアメリカへの訪問は非常に楽しいものでありましたが，とりわけアマーストへの訪問はこの上ないものでした。アマーストでは，博士のご親切なおもてなしにより貴大学を見学させて頂き誠に興味深いものが御座いました。短い滞在中に賜りました博士のご厚意，ご親切に心よりお礼申し上げます。博士にもお変わりなきことをお祈り申し上げます。

博士とシーリー夫人には重ねて心からお礼を申し上げます。

敬具
田中不二麿

この書簡は，田中がフィラデルフィア万国博覧会出席の為渡米しその帰り，教育制度調査取り調べの為に立ち寄ったアマースト大学の訪問を終え，帰国後，シーリー博士宛てに訪問のお礼を述べたものである。今回のアメリカ訪問は大変楽しいものに感じられたが，その中でも特にアマースト大学訪問は，一番楽しく思えたこと。博士の案内により学内を見学した際，非常に興味深く感じられたこと等を率直に述べている。しかしこの箇所では見学した内容については，一切触れていない。また一行が，アマーストにどの位滞在したのかも判然としない。

2．1878年3月6日付書簡

明治11年（1878年）3月6日

アマースト大学学長
　ジュリアス H. シーリー殿
拝啓

二年前のアメリカ滞在中にアマーストへ博士を訪問しました際，博士のご厚意により貴大学学生の体育訓練を見学する機会を得ましたが，それはとても興味深いものでした。帰朝後，わが国の学校で行われている体育訓練を何度か見学いたしましたが，日本の学生が学んでいる流儀はまだ未熟な上に，しかも変則的な方法で教わっている場合もあります。そのため，体育訓練による目立った効果が上がっていないようです。今後，わが国で上述の科目を発展せしむことが教育上肝要なことと思われますため，次のように致したいと存じます。我が文部省が，アメリカより技能，経験ともに豊かな体育教師を採用し大学を含む各種学校やそれ以外の教育機関における男女学生を対象に，学生の年齢に応じた適切な方法で体育をご指導願いたいのです。（体育教師は，決められた時間割りで授業に出席することとなります。）従いまして，貴大学には最も優れた体育制度を確立されております故に，失礼をも顧みず博士におすがりして，有能で適格な指導者を一人探して頂きたくお願い申し上げます。かようなことで博士にご迷惑をおかけいたし，はなはだ申し訳ございませんが，博士のご尽力を得られますならば誠に幸甚の極に存じます。私が考えておりますような指導者を探して頂けましたなら，その方との契約などについてのお手配などをこの手紙の使者である目賀田種太郎氏とお計り下さるようお願い申し上げます。目賀田氏は文部省からボストンに出向の在任官でございます。

博士とシーリー夫人に対して，お二人のご健康とご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

敬具

文部大輔
田中不二麿

この書簡によって初めて前回の書簡中見学した中味が，アマースト大学の体育であったことが明確になった。またこのことにより田中がいつの時点で最初にアマースト大学の体育に触れたのかという疑問も一気に解決したことになる。帰国後わが国で実施されている体育を注意深く観察したが，いずれもその方法が未整備の状態である。今後体育を発展させることが教育において，緊急の課題と考えられる。そこで文部省は，アメリカから優れた体育指導者を招き，わが国の学校でその実践を希望している。その際最も優れた体育制度が確立しているアマーストに範をとり，貴大学において適任者を選出，派遣を願いたい旨を伝えている。尚契約に関する担当者は，文部省米国留学生監督目賀田種太郎（在ボストン）が務めることを付け加えている。

3．1878年8月15日付書簡

明治11年（1878年）8月15日

アマースト大学学長

J.H. シーリー博士殿

拝啓

1878年3月6日付の親書でお願い申し上げました体育教師のご選任に関する6月3日付のお便りを拝受致しました。博士のご推挙によりわが国の体育教師の任を受けて下さったご親切なジョージA. リーランド氏は，貴大学の卒業生でかつ医師である旨了解致しました。

ご面倒にもかかわらず，博士の迅速で心のこもったご配慮のお陰で有能あり才たけた人物を見付けることができたことは喜ばしい限りでございます。誠にありがとう御座いました。これで日本の教育界の体育訓練が著しく進歩改善するものと思います。何故ならば，リーランド博士は体育指導を完成させ，私どもの期待に応えてくれるものと確信するからです。

リーランド博士との契約やその他の取決めは既に完了しており博士が間もなく日本に向けてご出発になられるという報告を，目賀田種太郎より受けております。

当件における博士のご厚意には心より感謝申し上げますと共に博士のご健康とご繁栄をお祈り申し上げたく存じます。どうぞシーリー夫人にも宜しくお申し伝えくださる様お願い申し上げます。

敬具

文部大輔

田中不二麿

1878年3月6日付の親書で文部省から正式に，アマースト大学シーリー学長宛てに体育教師の依頼が発せられた。これに対してシーリー学長は，6月3日付の書簡で，同大学の卒業生でかつ医師であるジョージA. リーランドを推挙した。博士の，熱心な努力により，有能でこの方面に熟達した人物を獲得することが可能となった。リーランド博士は必ずわが国の体育を完成させ，我々の期待に応えてくれるものと強く確信していた。

すでにリーランド博士はすべての契約を完了し，日本にむけて出発の日を待つばかりとなっていた。

おわりに

日米体育交流に関する史料を求めて立ち寄ったアマースト大学で，目に止まったシーリー関係文書を主要な手がかりとしながら，同大学図書館及び米国議会図書館他に所蔵されている関連史料を加えて，ジョージ・アダムス・リーランド博士がわが国の近代体育の指導者として招かれるに至る背景とその経緯について考察してきた。

本稿で明らかになった点を要約すると以下の様になる。

①アマースト大学学長シーリーと文部大輔田中不二麿との書簡

Ⅰ．文部大輔田中不二麿が，最初にアマースト大学の体育に触れたのは，1876年11月上旬であった。（当時の岩倉使節団の訪米時の行程及びリーランドの来日時の行程より推定。）

Ⅱ．文部省が直接，アマースト大学シーリー学長宛てに，体育の指導者を要請したのは，1878年3月6日付の書簡によってであった。

Ⅲ．これに対して，アマースト大学側は，1878年6月3日付でリーランド博士を推薦しわが国文部省宛てにその旨の返事を送っている。

Ⅳ．リーランドをわが国に招くにあたって，アマースト大学との交渉が円滑に進められた背景に，

文部大輔田中不二麿の果たした役割を見逃すことはできない。またボストンにあってその交渉役を務めたのは，留学生監督目賀田種太郎であった。

②田中不二麿・目賀田種太郎のリーランド招聘に果たした役割

Ⅰ．田中不二麿は，二度アマーストの地を訪れている。一回目は，岩倉使節団に随行して米国の学事を視察した1872年4月，通訳であった新島襄を伴いここに立ち寄った時である。新島の記述によれば，この時シーリー，クラーク，ヒッチコックに会い大学他を参観しているが体育に触れた様子は見られない。Ⅱ．でみてきた様に，これを機に二人の親交は深まっていった。二回目は，1876年秋フィラデルフィア博覧会に出席，その帰途アマーストを訪問している。この時初めてアマースト式体育の見学を行った。七年来の親交をもとに，文部省は田中を窓口にして，直接シーリー学長宛て体育教師の招聘を依頼した。こうした直接交渉役として彼の果たした役割は非常に大きなものがあった。

Ⅱ．目賀田種太郎は，文部省派遣在ボストンの留学生監督として，留学生の世話掛を務めていた。1876年7月田中が，教育制度調査の為ニューイングランド州を訪れた際にその案内役をかって出ている。直接リーランドと関わりを持ったのは，文部省の現地交渉掛として1878年7月1日ボストンにおいて日本赴任の契約を取り結んだ。

③アマースト大学体育学科の創設と活動～アマースト方式の特質とその担い手たち

Ⅰ．アマースト大学体育学科の創設は，第四代学長W.A.スターンの時，学生の健康問題に悩んだ結果，体育館の建設と有能な体育学の教授を任命することに端を発した。

Ⅱ．二代目教授として就任したヒッチコック・エドワードによって，アマースト方式が確立され，全米におけるモデルとして大いに参考とされた。

Ⅲ．注目すべきは，体育教師の役割を明確に示したことであった。つまり運動を十分熟知していると同時に医者の資格を持つ者であることを必要条件とした。この傾向は，体育教員の養成がある程度定着する時期までしばらく続いた。

Ⅳ．実施された体育の特徴は，まず学生の身体を健康に保つことに主眼に置いたこと。週4日の少力運動（軽運動）を必修とし，これに選択の多力運動（重運動）を置いた。そしてこれらの各種運動が可能な器具，施設等を準備した。更に教室と学生のリクレーション施設も構想していたことが窺える。

Ⅴ．疾病調査と活力検査を導入し科学的根拠に基づいた方法を用いて，運動効果を証明した。

こうして，ヒッチコック教授を中心に体系化されたアマースト方式はこれを着実に実践する優れた後継者たちによって受け継がれていった。本稿では以下の3名ネーザンアレン，エリシャH.バーロウ，ジョージA.リーランドについて検討を行った。アレンは，衛生学及び体育学の領域にわたり卓れた業績を数多く著したが，理事として大学の経営に主力を傾けた為に，ヒッチコック教授とは同じ道を歩むことはなかった。また日本からの誘いがあった時は，すでに65歳に達しており年齢的にはそのピークを過ぎていた。彼はアマースト大学の創設期にあって，学生の健康，体育の問題を大学管理者の立場で強力に支えていった人物であったと考えられる。

次にバーロウの場合であるが，彼は早くからその才能を開化させ，学生時代にすでにアマーストの体育をまとめて，『体操運動必携』（初版本）を著した。アマーストでは，重視されていた修辞学，演説法でも優れた能力を発揮し，ヒッチコック教授の後継者として最有力と見做される人物であったが，博士号を取得するとまもなく母校の教授として位置づいた。日本行きの誘いがあった当時は，35歳前後であり年齢的には理想の状態にあった。ただ一つだけ条件をつ

けるならば，彼は医師としての資格だけは持っていなかった。最後にリーランドについてであるが，アマースト大学卒業後，ハーバード大学医学部にて医学博士号を取得した時点で，誠にタイミングよく日本から招聘の話が持ち込まれたこと，前述のバーロウと共に『体操運動必携』をまとめた直後であったこと，経済的にも自立の必要にせまられていたこと，更には新天地で自分の才能を開化させたい機運に包まれていたこと等の様々な条件が重なり合って，リーランドの日本行きを可能なものとした。彼は，後に伊沢修二に宛てた報告書に，日本行きの目的を，「従前の国民より最も速に進歩したる国民として，著明なる大日本帝国の少年をして，其身体の健康と精神の爽快とを得しむるに在るのみ。」とその抱負を語っている。そして1878年8月13日，期待と不安を胸に未知の国日本に向けて船出をして行くことになる。

以上が本稿の検討を通して明らかになった点である。アマースト大学体育学科創設当初に限定し，しかもリーランドに直接関わる部分についてのみの検討に終始した。

すでにみてきた様に，こうした1860年代以降の体育の発展は，実はそれより遡ること凡そ35年程前にその兆候はすでに見られていた。ケンブリッジ(ハーバード大学)，ボストン，ノーザンプトンを中心にして活発な体育活動が実施されていたことが伝えられている。この様な，先行体験がアマーストの体育導入にどの様に関係していったのか，更にアマーストプランを中心になって支えたヒッチコックを初めとしてフーカー，アレン，バーロウ等の詳細な個人史研究も待たれるところである。

今回取り上げることができなかった問題点は，今後の課題としたい。

注

1) リーランドに関する先行研究として，今村嘉雄『十九世紀に於ける日本体育の研究』，不昧堂書店，昭和42年。前同『学校体育の父リーランド博士』，不昧堂書店，昭和43年。土屋忠男『明治前期教育政策史の研究』，文教図書，昭和37年。倉沢剛『小学校の歴史　I』，ジャパン・ライブラリー・ビューロー，昭和38年。能勢修一『明治期学校体育の研究』，不昧堂書店，1995年。等が挙げられる。

2) 今村前掲書『リーランド博士』，資料九　ポールC.フィリップス「アマースト史上に輝くジョージA.リーランド」，ダーカン女子寄与　ヒッチコック記念室資料。

3) Arinori Mori, "Education in Japan; A Series of Letters, Addressed by prominent Americans to Arinori Mori." New York; D. Appleton & Company, 1873.
森有礼が，駐米公使として，将来の日本の教育のあり方について米国各界の有力者15名に対して意見を聞き，それぞれの回答の手紙や論文を集め，その緒論として，自筆の日本略史を加えて出版したものである。これらの回答者のうち，大学長（元・現・将来の者も含む意味で）として，アマースト大学のStearns，Seelye等の名前がみられた。
Julius H. Seelye（1824～1895）：彼は，牧師であり哲学者であると同時に，学長でもあった。1853～58年には，New York州のSchenectady市におけるDutch Reformed教会の牧師を勤め，1858年，Amherst Collegeの哲学教授の椅子を得，1876年には，Stearnsの後継者としてAmherstの学長となった。1872年にはIndiaを訪問し，1875～77年の間，米合衆国下院議員となった経歴もある。Seelyeも，道徳教育の必要性を大いに強調しており，宗教的基盤を持たぬ教

育は危険であると，森の注意を引こうと試みている。(大久保利謙『森有礼全集』，第三巻，宣文堂書店，昭和47年，p 336～43，解説 p 15～26.)。1872年2月3日森からの手紙を受け取る。同月29日返事を送る。この返事の中で，健康問題に触れた箇所がある。「教育の徹底化は，国民の身体的状態にとって著しく有利です。これは注意深く整理された統計によって証明されています。他の条件が同じであれば，最も良く教化された社会の人々は最も健康的で長寿を保っています。教育を受けた人間は，一般にそうでない人間より長生きしています。この事実は教育ある人間が健康法に精通している事にのみよるのではありません。勿論この原因によることもあるでしょうが，その主な理由は，教育を受けた人間はその頭脳と神経組織をよりよく使うからなのです。そしてその場合，それが不釣り合いな位に発達するのではなく，身体的強さ，健康の源となるのです。」これは恐らくアマーストでの経験に基づいた発言と思われる。(尾形裕康『学制実施経緯の研究』，校倉書房，昭和38年，p 346～49.)

4) Birdsey Grant Northrop, "The Japanese Indemnity" (1872.9.5 横浜からの書簡)
日本の実情報告として，アマースト・カレッジのシーリー教授からの書簡を紹介し，そこから教育費充当の具体例として，「日本の婦女子の教育振興費用に充てるべきである」と述べていた。「本来無条件で返還するのが望ましいが，しかしそれが教育費として役立てられたならば大変に喜ばしい」と述べ，特に森の希望「帝国の将来のための教育振興」があって著したとされている。

5) Amherst College, "A Report of Twenty Years Experience in the Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College, to the Board of Trustees." June 27, 1881. p3～4.

6) 故目賀田男爵伝記編纂会編『男爵目賀田種太郎』，同会，昭和13年，p 21～79.
明治12年 (1879) 3月8日付「音楽傳習所設置案」が文部省内に回付されて間もなく，同月25日付で音楽教師メーソンの招聘が決定し，アメリカ在住の目賀田が日本側文部省の代理人としてメーソンと条約を結んだ。音楽取調掛設置は，10月であったが，すでにこの時点で決定されていたと思われる。
この件に関しては，史料「L.W. メーソンと目賀田種太郎との條約書」英文・和文，1879年6月6日。(『東京芸術大学百年史』第一巻，昭和62年，p 22－25.) に見ることができる。契約の内容については，任期，給料，家賃，授業担当時間，授業についての意見陳述，職務・規則遵守，病欠・復職の期間，条約満期前の解約，再契約・中途での職務の解約等10項目に及んでいる。しかしながら，これよりおよそ1年前に結ばれたリーランドとの契約書は，未だ見つかっていない。おそらくこれと同様の内容の契約が結ばれたと思われる。

7) Amherst College,"Student Life at Amherst College, Its organizations, their membership and History.", 1871. p111.

8) Amherst College,"Catalogue of the Officers and Students of Amherst College, for the Academical Year", 1859-60.

尚参考資料として，学生数の推移を付しておいた。

アマースト大学学生数の推移

Years of	Seniors.	Juniors.	Sopho-mores.	Fresh-men.	Total.
1859-60	48	56	71	67	242
1860-61	51	56	60	53	220
1861-62	58	49	50	78	235
1862-63	42	42	76	60	220
1863-64	30	58	64	30	202
1864-65	57	56	54	45	212
1865-66	54	51	44	54	203
1866-67	49	44	62	70	225
1867-68	41	61	69	73	244
1868-69	57	58	71	65	251
1869-70	53	64	63	75	255
1870-71	65	49	76	71	261

Report of the Professor of Physical Education and Hygiene to the Trustees of Amherst College, for the year 1862-63.

9) Fred. Eugene Leonard, A.M., M.D. "A Guide to the History of Physical Education" 1923.
尚前掲書の翻訳版として，レナード教授・マッケンヂー博士原著『欧米体育史』，第二編　米国，目黒書店，昭和2年6月。が挙げられる。

10) J. Edmund Welch, "A Physical Education Reader, History and Foundations", 1974.

11) The Trustees of Amherst College,"Amherst College－Biographical Record of the Graduates and non-Graduates", 1821-1921. Edited by Robert S. Fletcher, 1897 and Malcolm O. Young, 1916, 1939.
Amherst College, "Triennial Catalogue of Amherst College including the officers of Goverment and Instruction, The Alumni", 1875.

12) Amherst College,"Catalogue of the officers and students, Amherst College. for the academical year, 1871-73. より引用。
アマースト大学　学科課程表（1871～73年）

○ Course of study and Instruction.

Freshman year …… During the year —— Exercise in physical culture, four days in the week.
Sophomore year …… Exercise in P.C.
Junior year …… 〃　〃　.
Senior year …… 〃　〃　.

○ Lectures

Law of Health (Freshman)…… prof. Hitchcock, Monday, at eight o'clock.

○ Tabular view of college Exercises.

(Senior year)—Gymnasium exercises at 9 : 20 o'clock, A.M., Mondays, Tuesdays, Thursdays

and Fridays through the year.

(Junior year)—Gymnasium exercises at four and five o'clock, P.M., Mondays, Tuesdays, Thursdays and Fridays interchangeably through the year.

(Sophomore year)— 〃 〃 at three o'clock and four o'clock, P.M., and half−past ten o'clock, A.M., 〃 〃 interchangeably through the year.

(Freshman year)— 〃 〃 at eight o'clock, A.M., 〃 〃 through the year.

13) Edward Mussey Hartwell, Ph.D., M.D., of Johns Hopkins University,"Circular of Information of the Bureau of Education. NO.5, 1885−Physical Training in American Colleges and University. 1886. pp.183. 等を著している。

14) "A List of the titles of Abstracts, Tables, Statistics, Exhibition chedules and other matters published by the Department of the Hygiene and Physical Education, Amherst College, From 1861-62 to 1905-6, Inclusive", pp.10.
その他にヒッチコック関係史料，アレン関係史料等を参考に作成した。

15) Kenneth D. Miller, "Stearns, Hitchcock, and Amherst College". Journal of Health-Physical Education-Recreation, May-June 1957, p29〜30.
Prof. Edward Hitchcock, M.D., "The Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College", 1879, p3〜8.
"The American College and University", 1990, p150〜155.

16) Amherst College,"Obiturary Record of Graduates of Amherst College-Academical Year Ending July 3, 1889" p174〜177.
Amherst College, "Biographical Record of the Alumni of Amherst College during its First Half Century, 1821-71", 1883.

17) Amherst College Special Collections，アレン関係史料

18) Malcolm Oakman Young, "Amherstiana−A Bibliography of Amherst College", Amherst College, 1921. pp.40.
"Amherst College. Chronicles of the class of 1866", Second Series, July, 1874.